

土師器を須恵器窯で焼くことに関する覚書

－ 備前佐山東山窯跡群資料を対象として－

亀 田 修 一

－ 論 文 要 旨 －

岡山理科大学考古学研究室と同博物館学芸員養成課程では、2012～2017年、岡山県南東部に位置する邑久窯跡群内の佐山東山窯跡群（佐山東山奥窯跡と佐山東山窯跡）を発掘調査し、器形や技法は土師器であるにもかかわらず、焼成は明らかに須恵器である甕や移動式カマドの破片を確認した。須恵器窯で土師器を焼成することは、一般的なこととは考えづらい。

古代の土器作りに関しては、『正倉院文書』や民俗例などから「須恵器は男性が作り、土師器は女性が作る」という性別分業が考えられてきた。そして1980年代後半の平城京長屋王邸出土「長屋王家木簡」によって、少なくとも都およびその周辺において、女性が土師器作りに関わっていたことは間違いないと、より考えられるようになった。

このような性別分業がこの吉備の地でも行われていたならば、佐山東山窯跡群における「須恵器窯で焼成した可能性がある土師器」の存在は、備前国衙などに須恵器を供給していた「官窯」的な場である可能性がある佐山東山窯において、須恵器を生産していた「男性工人」たちの周辺に「土師器作りの女性たち」がいたこと、さらに同じ窯で焼くことができる関係があった可能性が推測できることになる。土師器生産における家内工業的な姿が想像されるならば、夫が須恵器工人で、妻が家で土師器を作っていたような空想も可能かもしれない。

キーワード：備前，邑久窯跡群，佐山東山窯跡群，須恵器窯，須恵器，土師器，土器生産，男女性別分業

1. はじめに

岡山理科大学考古学研究室と同博物館学芸員養成課程では、2010年から岡山県南東部に位置する邑久窯跡群の発掘調査を行ってきた（亀田・白石・徳澤2014・2016・2017）。そして佐山東山窯跡群内の佐山東山奥窯跡（10世紀）と佐山東山窯跡（8世紀中葉～後半）において、器形や技法は土師器であるにもかかわらず、焼成は明らかに須恵器である甕や移動式カマドの破片を確認した。

同じように2010～2012年に発掘調査した佐山新池1号窯跡（8世紀後半）ではこのような須恵器窯焼成の土師器は確認できていない。これまで発掘調査された邑久窯跡群内においても未確認である。

須恵器窯で土師器を焼成するという点に関しては、やはり一般的なこととは考えづらい。偶然、このような行為がなされたのかもしれない。「須恵器作りが男性で、土師器作りが女性」という性別分業も古くから述べられている（小林1965, 田中1967 a・b, 佐原1979, 都出1982など）。佐山東山窯跡群で出土した須恵器窯で焼かれた土師器をもとに、当時の須恵器生産体制のあり方と性別による分業について、少し検討してみたい。

2. 資料

まず、佐山東山窯跡群において出土した遺物の中で、小稿で取り上げる「須恵器窯で焼成した土師器」について説明しておく。

「須恵器」と「土師器」の区分は、形態、調整技法を基準とした。両者の区分に一般的に使用される焼成方法、つまり還元炎焼成と酸化炎焼成は今回の場合使用できないので上記の2つを基準とした。ここで区分に関して説明する対象資料はおもに甕類で、その時期は基本的に奈良時代とする。

まず、形態であるが、これはこれまでの須恵器・土師器研究で蓄積してきた器の種類を判断基準とする。

次に、調整技法であるが、須恵器の壺・甕類の場合は一般的に外面にタタキの痕跡を残し、内面に同心円文の当て具痕跡を残している。またハケ目に関しては、回転を利用したカキ目は見られるが、手持ちのハケ状工具による「ハケ目」は一般的には見られない。ヘラケズリに関しても、須恵器の場合、内面に見られるものは一般的ではない。

土師器は、指によるオサエやナデ、布などによるナデ、板状工具によるナデ、つまり板ナデやハケ目調整が基本であり、タタキは基本的に行われない。またいわゆるヘラによるヘラケズリでは、回転を利用することは基本的になく、手持ちで内外面をケズる。

大まかではあるが、以上の基準によって、以下の資料を抽出した。

（1）佐山東山窯跡（図1-1～4, 6）

岡山県備前市佐山に位置する8世紀中葉～後半の須恵器窯跡である。標高91～97mの山の西向き斜面に築かれた無階無段の半地下式登窯である。斜長は約16m、最大幅は2.5mあり、奈良時代の窯としては最大級の大きさである。2013年から発掘調査を開始し、2017年現在も調査中である。

遺物は、杯類、椀類、皿・盤類、高杯、平瓶、こね鉢、甌、壺・甕類などが出土している。そして金属器模倣の稜椀、皿・盤類、大型の平瓶など官衙や寺院などに供給される種類の器が比較的多く見られる。また、「□□十六[年]」ヘラ書き銘文埴、「葛原小玉女」ヘラ書き須恵器壺、「福」押印須恵器椀、施文風字硯などの文字資料および文字関連資料が出土している。「□□十六[年]」は天平16（744）年か、延暦16（797）年と推測され、その用途は墓誌か買地券と推測している。以上のような出土資料から、この窯は「備前国」に関わる広義の「官窯」の可能性を推測している。

なお、この窯跡では8世紀のものと別に、点数はさほど多くはないが、10世紀の須恵器（椀、杯、小皿、壺など）も出土しており、土器の破面の状況などから一時的な再利用の可能性を考えている。

そして、上記のような須恵器・埴などの遺物に混じって、一見すると土師器と推測される器形のもの少数出土している。

1は、甕の口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部の残存幅が約8cmの大きさで、やや不確実ではあるが、復元口径は16.5cmである。口縁部はゆるやかに外反し、端部は幅6mmほどの面を持ち、その中央部が少し凹むところとそのまま平坦なところがある。口縁部は内外ともにヨコナデされている。胴部は卵形で、やや長目で、最大径はやや上部にある。胴部外面は表面がやや荒れており、不確実ではあるが、ナデのようである。内面上部は板状工具によるナデ上げの痕跡が明確に残り、中央部は別の工具によって右上方にナデ上げられている。両者のナデはともに強めで、ヘラケズリのようにも見える。口縁部・胴部の厚さはともに7～8mmである。

胎土は一部3～4mmほどの大きめのものから、1mm前後の石英などの白色砂粒を比較的多く含み、焼成は良好で、須恵質であり、色調は灰色である。第5トレンチ西の下層の灰原層で出土している。

胎土は後述する甕（2）や多孔甌（3）と類似している。

2aは、甕の口縁部付近の破片である。口縁部はゆるく「く」の字形に折れ曲がって外反し、やや直線的に伸

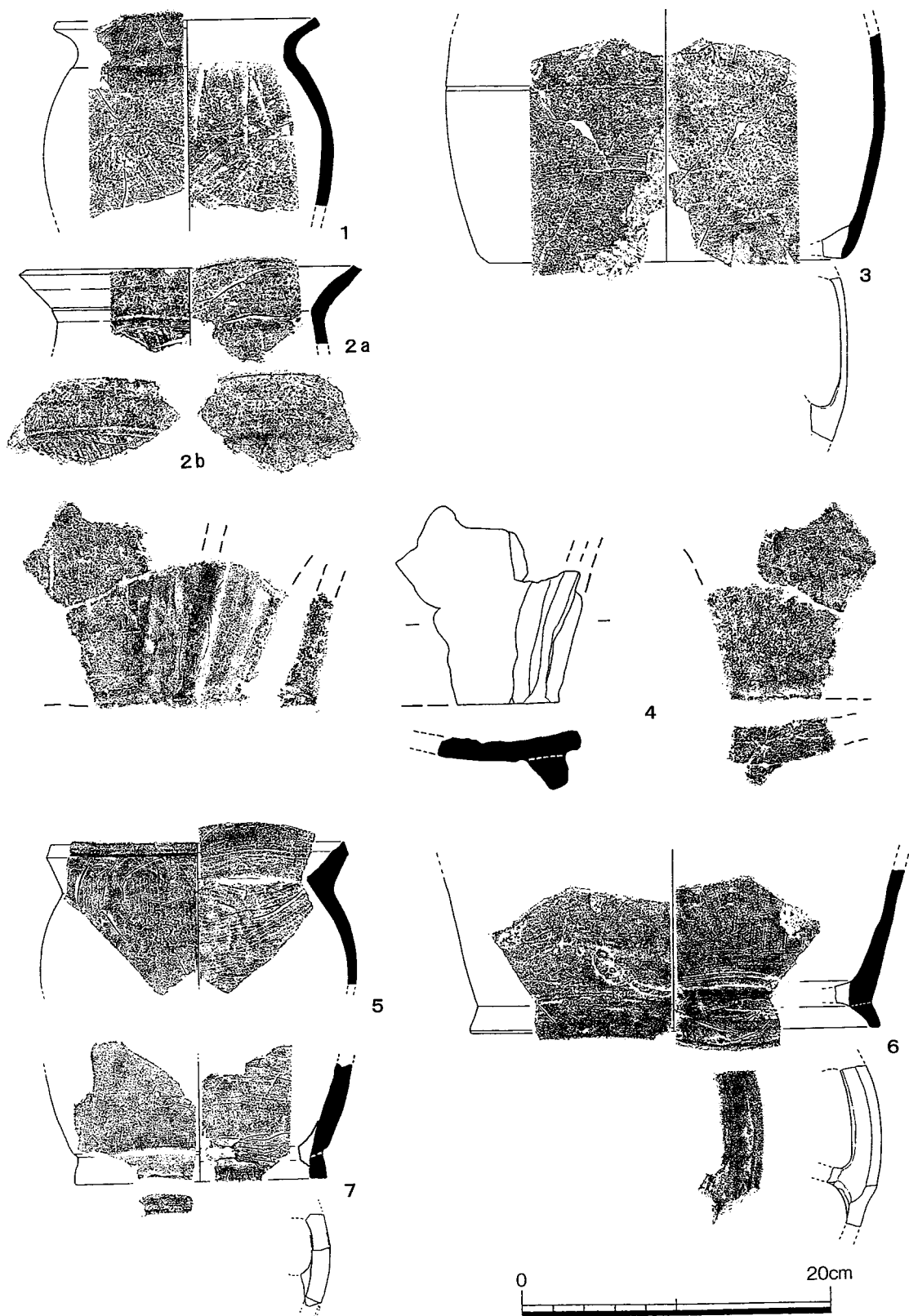


図1 備前佐山東山窯跡群出土須恵器窯焼成土師器および関連資料 (1/4)

1～4, 6: 佐山東山窯跡 5: 佐山東山奥窯跡 7: 佐山新池1号窯跡

びる。そして口縁部端面は幅6mmほどの面を持つが、わずかに凹む部分がある。口縁部内外面はヨコナデで、外面口縁部から下方約3cmのところに鈍い幅2～3mmの沈線がめぐらされている。その下に左上がりのハケ目の痕跡が残っている。1cm幅に3本の筋(木目痕跡)が見えるやや粗いハケ目である。内面の口縁部と胴部の境はあまり明瞭ではない。胴部内面は明確ではないが、ヨコナデのようである。胎土は3～4mm以下の石英などの白色砂粒が多く含まれ、焼成は良好である。窯跡の下方、東側の第3トレンチ東の表土の下層で出土している。

また、同じトレンチで同一個体の可能性が高い破片(2b)が出土している。基本的な特徴は同じであるが、この破片の口縁部内面にはヨコハケの上をヨコナデされた痕跡が見られる。このハケ目も1cm幅に3本の木目痕跡が見える。

3は、多孔甕の胴下部から底部にかけての破片である。全体に歪んでおり、復元底径ははっきりしないが、約23cmである。歪んでいるため復元図では胴部と底部の直径がほぼ同じ大きさになっているが、本来は胴部径の方が大きくなるものと推測している。底部から約11cm上方の胴部外面に幅3mmの浅い沈線がめぐらされている。少し低い、把手の接合位置を示しているのかもしれない。胴部内外面は基本的にヨコナデのようであるが、外面の下から約8cmより上方は指オサエとナデのようである。蒸気孔ははっきりしないが、現存の長さは約8cmで、細長い楕円形を呈しているようである。この大きさのものがそのまま並べられているならば、その数は8～9個になる。蒸気孔はヨコヘラケズリで開けられている。底部に高台はない。胴部の厚さは7mm前後である。

胎土は、ほかの須恵器に比べて粗く、3、4mm以下の石英などの白色砂粒が多く含まれており、焼成は良好で、須恵質、色調は灰色である。胴部外面のヨコ沈線付近に一部深緑褐色の自然釉が見られる。胎土・焼成・色調は前述の1、2の甕と大きな違いはない。窯跡焚き口部西側の第3トレンチ西南灰原層で出土している。

4は、いわゆる土師器ではない。移動式カマドの焚き口部の破片と考えている。ここでは関連するものとして挙げておく。下面長約6.5cm、高さ約13cmの破片で、図右側に焚き口側の生きた面が残る。その内側1cm弱ほど離れて、基部幅2.7～3.2cm、高さ1.4～2.6cmで、頂部がやや平らな断面台形状の突帯がつけられている。突帯上面での幅は広いところで約1cmある。

胴部外面はなんらかの工具でタテ・ヨコにナデたあと、指などでナデた痕跡があり、内面は下方がヨコナデ、上方はヨコナデとタテナデの痕跡が見られる。突帯は指オサエとナデで成形・調整されている。胎土は3、

4mm以下の白砂がかなり混じっている。本来土師質に焼成されるものが、須恵質に焼成されたような印象を持つ。上部での胴部の厚さは1.1～1.2cm、下部の接地面の厚さは2.4cmで、平らである。焼成は良好で、色調は灰色である。第5トレンチ西南(灰原部)の第2層で出土している。

(2) 佐山東山奥窯跡(図1-5)

岡山県備前市佐山、上記の佐山東山窯跡の東約100mの標高123～125mに位置する10世紀の須恵器窯跡である。無階無段の半地下式登窯で、斜長は5.05m、最大幅は1.78mあり、窯体の改修などは確認できなかった。2012、2013年に発掘調査を行った。

遺物は、一般的な杯類、椀類がほとんどで、壺類が多少あり、甕類はあまりみられなかった。杯は、無高台、輪高台のものがあ、基本的には回転ヘラ切りされている。椀は平高台で、基本的には回転糸切りされ、一部回転ヘラ切りのものがある。壺は耳付きのものが出土している。珍しいものとしては風字硯が出土している。また、回転糸切りの平高台のスタンプ痕跡を残す断面三角形の粘土塊の置き台が出土している。

5は、甕の口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部は「く」の字に外反し、端部を上方につまみ上げ気味にヨコナデし、端部に幅8mmほどの面を持つ。胴部外面はタテ方向のハケ目痕跡がかすかに見られ、口縁部中位まで及ぶ。内面も同様のハケ目が見え、右上がり方向に見られる。内面の工具幅は最大約3cm確認でき、その中に12本の木目痕跡を確認できる。口縁部内面にもヨコ方向のハケ目が見られ、口縁部と胴部の境は、比較的明瞭である。口唇部付近は内外ともに幅8mmほどのヨコナデが見られる。復元口径は18.8cmである。

胎土は1mm前後以下の白色砂粒などが比較的含まれているが、これまでのものと異なり、大粒のものは少ない。焼成は堅緻で、色調は灰色を基本として、一部黒灰色、濃青灰色である。

(3) 佐山東山窯跡群の須恵器窯焼成土師器

以上、佐山東山窯跡群の須恵器窯で焼成した土師器4点と移動式カマド1点、合計5点をあげた。このほかに図化していないものもあるが、基本的には数は少ない。

佐山東山窯跡出土須恵器には8世紀中葉～後半のもののほか、10世紀のものが一部あり、今述べてきた須恵器窯で焼成した土師器も10世紀のものである可能性はあるが、佐山東山奥窯跡出土例(5)と比較して、その形態の違いなどから積極的に10世紀のものと推測することも難しく、大多数の須恵器と同じ8世紀後半を中心とする時期のものと考えている。

この図示したものは、いずれも異なる形態をしてい

る。10世紀のものと推測される5の甕のような口縁部を有し、内面の口縁部と胴部の境に比較的明瞭な稜線を残すものは佐山東山窯跡のものには見られない。8世紀のものと推測される1, 2も、口縁部形態、胴部の調整方法はそれぞれ異なる。

3の甕に関しては、須恵器として焼成されるものも各地で見られ、本来これが土師器として作られたのか、やや気になる点もあるが、胎土が1, 2の甕と比較的類似しており、このグループに含めた。

この佐山東山窯跡群と佐山新池1号窯跡ではほかに須恵質の甕が出土している。佐山東山窯跡で出土したもの(6)は底部に高さ約1.5cmのやや外に広がる高台をつけており、復元高台径は26cmである。胴部外面は基本的に指オサエ、ヨコナデであるが、一部ヨコ方向のタタキかハケ目の痕跡と見える部分もある。内面は板状工具(?)によるタテナデのあと、底部付近が指などでヨコナデされている。胎土はこれまで述べてきたものよりは良好で砂粒はあまり含まれていないが、素地自体はやや砂質である。蒸気孔は楕円形で長さは約6cmで、ヘラケズリとナデで調整されている。

佐山新池1号窯跡で出土した甕(7)も高台付きで、高台の高さは1.8cmである。復元高台径は約16cmと上記の2例よりはやや小型である。蒸気孔は同じく楕円形であるが、長さは3.5cmとやはりやや小さい。ヨコヘラケズリで孔が開けられている。胴部内外面はヨコナデであるが、内面は何らかの工具を使用したのか、ヨコスジが見える。この佐山新池1号窯跡の甕は胴部と高台部で胎土が異なり、胴部は白灰色、高台部は灰色である。胎土は、素地自体は粘土質で、2, 3mm前後以下の砂粒がやや含まれているが、前述の「土師器」に比べ、良好である。焼成は良好であるが、さほど硬質には見えない。

佐山新池1号窯跡と佐山東山窯跡群で確認した甕は以上の3点で、本来土師器であろうかと推測した3のみが高台なしで、本来須恵器に焼成しようとしたものとはともに高台が見られた。これらの佐山地区の窯跡群の場合、高台の有無も本来須恵器として焼成しようとしたものか、土師器として焼成しようとしたものか、違いを示しているのかもしれない。

4の移動式カマドは一般的に土師質に焼成されるもので、このような須恵器窯で焼成するものは珍しいと考えている。

以上のように、今回の調査で確認できた須恵器窯で焼成した土師器とその関連するものは、甕、甕、移動式カマドで、杯・皿類は確認できなかった。杯・皿類は須恵器と土師器の形態が類似したものがあり、区別できないだけかもしれないが、明確に区別できそうなものではなく、ひとまず今回確認できた器種は以上の3種類である。

このように甕などの技法的な特徴、器種・数の少なさを考えると、須恵器工人がたまたま土師器のようなものを作り、焼成したというよりも、土師器作りの人々が佐山東山窯跡群における須恵器生産に何らかの理由で関わり、自分たちが作った「土師器」を須恵器窯で焼成した可能性を考えてもよいのではないであろうか。

3. 土師器を須恵器窯で焼くことに関する若干の検討

上記のように、筆者らが2010年から発掘調査した岡山県南東部の邑久窯跡群内の8世紀中葉～後半と10世紀の佐山東山窯跡群において、須恵器窯で焼成された土師器と関連するものが少数出土している。

須恵器が日本列島で初めて生産されるようになったのは5世紀初め頃、朝鮮半島南部の伽耶地域や全羅南道地域の人々によってと考えられている(田辺1981, 中村1981・2001, 酒井2013など)。そしてその初期段階の、TG231・TG232号窯, TK73号窯などの須恵器には、朝鮮半島系の新たな器種とともに、日本列島の土師器に関わる器形・特徴などが見られ、指導者としての渡来工人に加えて、日本列島の土師器作りの人々が動員され、生産していたのではないかと考えられている(中村1978, 藤田ほか1995, 岡戸1996など)。これは地方の初期須恵器窯である、備中奥ヶ谷窯跡においても見ることができ(柴田1997)、この窯の製品かどうかはわからないが、総社市法蓮37号墳では土師器高杯の器形をした須恵器が出土している(村上1985, p.19, 第17図3)。

その後、須恵器生産体制が整うなかで、このような土師器作りの人々の関与はよくわからなくなる。しかし、一部地域においては6, 7世紀の須恵器窯跡や古墳などで赤焼きの須恵器や土師器との関わりが推測されるものが見られる。福岡県のいわゆる「似非土師須恵器」などと呼ばれるものである(橋口1989)。

この「似非土師須恵器」という用語は、橋口達也が提唱したもので、「形としては須恵器に近いものから土師器に近いものまで多様で、手法的には須恵器、焼成は硬質で、色は黄・茶・赤褐色を呈する土器」である。橋口が提示した資料の中には小稿の「須恵器窯で焼かれた土師器」と類似するものが含まれている。橋口は「一般の須恵器工人が片手間程度に土師器をまねあるいは土師器に似せて作り、焼いたもの」と理解している。確かにそのように考えられるものもある。ただ、それだけではなく、小稿の佐山東山窯跡群の土器と同じように土師器作りの人々が須恵器作りに関わることで、本来赤焼きにする予定の「土師器」を須恵器窯で焼成したのものもあるのではないかと考えている。

さらに、朝鮮半島からの新たな渡来人によって新たな

陶質土器作り、新たな軟質土器作りの影響が入ったことによって、新たな朝鮮半島と関わる形態、技法、手法などによる「須恵器」が生産された可能性も考えられるのではないかと考えている⁽¹⁾。

たとえば、筑前牛頸窯跡群およびその関連遺跡では6世紀後半から8世紀にかけて、渡来人の存在なしには説明しづらい円筒形土製品や有溝把手付きの甗などが出土し、この窯群で生産されたと考えられている(舟山・石川2008, 亀田2008)。北陸地域においても同様の様相があるようであり(望月1999)、ある面で「純粋な」須恵器工人による須恵器生産に、部分的に朝鮮半島からの新たな影響があったことは十分考えられる。

そして小稿の奈良時代の佐山東山窯跡群における須恵器窯を使つての土師器焼成がある。

奈良時代における須恵器窯での土師器焼成に関しては、兵庫県三田市落合窯においても見ることができる(山本・山田1987)⁽²⁾。ここでは「硬質土師器」とされているもので、甗と用途不明品とされるものがある(p.225, 第145図152, 153)。後者に関しては、実物は見ていないが、甗の可能性はないであろうか。

このような例はほかにもあるようであるが、やはりあまり多くはないようである⁽³⁾。

以上のように、奈良時代に一般的な土師器が須恵器窯で焼かれることについては、偶然ということも十分考えられる。しかし、この佐山東山窯跡は前章で述べたようにその出土遺物の器種構成や文字資料の存在などから備前国が関与する窯と推測される。広義の「官窯」的なものである可能性がある。確かに偶然このような土器が生産されたことは十分考えられるが、当時の「官窯」における須恵器生産体制と甗などの土師器作りのあり方を考えると、気になる。

日本列島の土器作りに関して、古くから、「須恵器は男性が作り、土師器は女性が作る」と言われている(小林1965, 田中1967 a・b, 佐原1979, 都出1982・1989, 巽1983など)。一般的に古墳時代以降の須恵器生産は、国家や地方豪族、地方の国・郡などによって管理され、「男性」の「須恵器工人集団」がその生産に関わっていたと考えられている。

一方、古墳時代から奈良時代の土師器生産に関しては、民俗例や『正倉院文書』などの記録から、女性が家内工業的に、または「土師器工人集団」の一員として生産していたと考えられている。

奈良・平安時代の土師器作りと女性との関わりに関する代表的な文書は以下の通りである。

『正倉院文書』天平勝宝2(750)年の「浄清所解」(『大日本古文書』3-412, 11-350, 同文所収)

浄清所解 申作土器事

合貳人 単功壹伯柒拾捌人

讃岐石前相作掘土運打薪採藁備井進京単功八十九人

借馬秋庭女作手単功八十九人

田坏二千四百口 功廿四人 人別日百口 十口充銭三文

鏡形九百九十口 功卅三人 人別日卅口 十口充八文

片塊三百六十口 功九人 人別日卅口 十口充五文

片佐良六百六十口 功廿二人 人別日卅口 十口充八文

小手洗六口 功一人 一口充六文

惣作器肆仟肆拾陸口

これは天平勝宝2(750)年の記録であるが、これには、讃岐石前という男性が、原料の土を掘り、運び、打ち、薪を採り、藁を用意し、製品を京に運ぶ作業をして、土師器作りの手伝いをしたこと、借馬秋庭女という女性が、土器(土師器)を作ったことが書かれている。

また、延暦23(804)年の『皇太神宮儀式帳』には、「土師器作物忌、無位麻績部春子女。父無位麻績部倭人」と「陶器作内人、無位磯部主磨」という記録がある。小林行雄は前者に関しては、父と連名になっているが、娘が先に記されていることから、「じっさいの製作者は春子女であり、父は体力を必要とする労務を分担した」と考えている。そして後者の陶器作りに関しては、「検討の余地はあるとしても、主任技術者は男性であったことは確実」と考えている(小林1965)。

このように750年と804年の記録には土師器を女性が作っていたことが記されている。

さらに、平城宮・京出土木簡にも関連資料がある⁽⁴⁾。古くから取り上げられていたものが、平城宮内裏北方官衙地区出土の「□□[土師カ]女六人米二石七斗/人別四斗五升」である(奈良国立文化財研究所木簡番号176, 奈良国立文化財研究所1969)。その後、長屋王邸関連のSD4750という溝から35,000点におよびいわゆる「長屋王家木簡」が発見され、その中に「土師女三人瓮造女二人雇人二□/受曾女九月六日三事 □□[大嶋カ]」(木簡番号333)という木簡が含まれていた⁽⁵⁾。これは土師器を作る女性3人と甗を作る女性2人などに食料を支給したもので、長屋王邸に土師器作りの女性がいたことがわかる。さらにこれとともにSD4750という溝から出土した土器を分析した玉田芳英は技法、形態、暗文などを分析し、この溝から出土した土師器の大半をこの土師女と瓮造女が製作した可能性を考えている。ちなみにこの溝から出土した木簡群には和銅4(711)年から霊龜2(716)年の年号が記されたものがあり、これらの遺物の時期はこの頃と考えられている(奈良国立文化財研究所1995, 玉田1995)。ここで少し気になる点は、「土師女」と「瓮造女」が区別されていることである。註5の木簡番号334にも「土師女三人奈閑作一人」とあり、素直にみれば、甗を作る瓮造女(奈閑作)と暗文土師器などの杯や皿などを作る土師女が区別されていた可能性があり

そうである。

以上、奈良時代の土師器作りのあり方を『正倉院文書』や木簡、そして平安時代の『皇太神宮儀式帳』などを通して見てきたが、その結果は諸先学が述べて来たように、全てではないと思うが、土師器は女性が作っていた可能性が高そうである。そして「長屋王家木簡」によれば、そのなかでも「土師女」「瓮造女」「奈閑作」などがあり、作る製品によって区別されている場合がありそうであることがわかった。

そこで、上記の成果をふまえて、佐山東山窯跡群における須恵器窯で焼かれた土師器について考えてみたい。

まず上記の性別による分業が地方においてもなされていたかどうかである。もし分業化が行われていたならば、佐山東山窯跡群で生産された須恵器焼成の土師器は女性で作っていた可能性が推測されることになる。

この推測が認められるならば、備前国衙などに須恵器を供給していた「官窯」的な場である可能性がある佐山東山窯において須恵器を生産していた「男性工人」たちの周辺に「土師器作りの女性たち」がいたこと、さらに同じ窯で焼くことができる関係があった可能性が推測できる。

彼・彼女たちの関係については、土師器生産における家内工業的な姿を想像することが可能であるならば、夫が須恵器工人で妻が家で土師器を作っていたような空想、須恵器工人の男性の隣の家で女性が土師器を作っているような「やきものの村」を空想することも可能かもしれない。

4. おわりに

以上、佐山東山窯跡群で出土した「須恵器窯で焼成した可能性がある土師器」を取り上げ、この窯場での須恵器生産のあり方、土師器作りの人々との関わりなどを検討してきた。

これまでの諸先学の検討成果と「長屋王家木簡」などによれば、都およびその周辺において、少なくとも土師器を女性で作っていたことは間違いないようである。そしてこれまで一般的に考えられてきたように須恵器作りを男性が担当していたならば、都およびその周辺では、「須恵器は男性が作り、土師器は女性が作る」という性別分業が行われていたものと推測される。

そして、このような性別分業がこの吉備の地でも行われていたならば、佐山東山窯跡群における「須恵器窯で焼成した可能性がある土師器」の存在は、備前国衙などに須恵器を供給していた「官窯」的な場である可能性がある佐山東山窯において、須恵器を生産していた「男性工人」たちの周辺に「土師器作りの女性たち」がいたこと、さらに同じ窯で焼くことができる関係があった可能性

が推測できることになる。土師器生産における家内工業的な姿が想像されるならば、夫が須恵器工人で、妻が家で土師器を作っていたような空想も可能かもしれない⁽⁶⁾。

小稿をなすにあたり、下記のみなさん方にお世話になりました。末筆ながら記して謝意を表します。失礼ながら敬称は省略させていただきました。

石木秀啓、市川創、伊藤晃、大塚絃司、小田裕樹、尾野善裕、金田明大、久住猛雄、倉内岳人、佐藤浩司、佐藤隆、白石純、武末純一、寺井誠、徳澤啓一、中村浩、土生田純之、林部均、平山晃基、富加見泰彦、望月精司、森内秀造、横山聖、第152回歴史土器研究会に参加されたみなさん

註

- (1) 朝鮮半島の三国時代の窯を使った土器生産では、陶質土器のみの場合もあるかと思うが、忠清北道鎮川の三龍里・山水里窯跡群では、陶質土器、軟質土器、瓦質土器がともに出土しており、同じ窯で焼く時を分けたり、同じ焼成において焼く場所を分けることなどによって焼き分けを行っていたことが推測される（崔秉鉉ほか2006）。
- (2) この落合窯に関しては、森内秀造氏にご教示いただいた。記して謝意を表したい。なお、本文中に挙げたもの「硬質土師器」以外に、p.213、第136図108は杯であるが、外面体部下半から底部にかけて不整方向に手持ちヘラケズリしており、土師器杯の器形に近くなっており、同109も杯であるが、内面底部をハケ状工具でナデている。これらは須恵器と土師器の形態・技術が合わさったもので、本文中のものととはまた別グループの関係資料であろう。
- (3) ほかに、福岡県牛頭窯跡群では基本的にこのような例はないが、9世紀の石坂E-3号窯跡の灰原で須恵器焼成の土師器が出土していることを石木秀啓氏にご教示いただいた（大野城市教育委員会1997）。また、8世紀の大分県松岡3号窯跡の灰原において土師器杯の器形のものが出土していることを佐藤浩司氏にご教示いただいた（大分市教育委員会2002）。記して謝意を表したい。
- (4) 平城宮・京出土木簡に関しては、基本的に奈良文化財研究所木簡データベースによった。
- (5) 長屋王家木簡には、本文中のもののほか、以下のものもある。「土師女三人奈閑作一人米八升受曾／女八月廿九日 石角書吏」（木簡番号334）
「土師女三」（木簡番号0）
「土師女三口雇人一口米八升受小逆／七月十六日三事」（木簡番号1975）
「□女\土師女三口雇人二人米一斗受小逆／七月廿七日三事 甥万呂」（木簡番号1976）
- (6) 吉備地域における奈良・平安時代の須恵器・土師器生産に関する研究としては、武田恭彰1989などがある。また、岡山県浅口市金光町上竹西の坊遺跡において、7世紀前半～8世紀代の

半地下式登窯の須恵器窯跡（1基ともう1基の灰原？）と8世紀中頃～後半の96×75cmの楕円形の土師器窯1と96×84cmの楕円形土師器窯状遺構1基が検出されており、これらの窯跡内やその周辺で酸化炎焼成の須恵器、還元炎焼成の土師器と推測されるものが出土している。この遺跡はまさに須恵器生産と土師器生産が交差した場所で、須恵器工人と土師器作りの人々が協業していた可能性が推測される（井上ほか1988）。

参考文献（五十音順、韓国の文献は日本語読みになおして同様に並べた）

浅香年木1971『日本古代手工業史の研究』法政大学出版局

井上弘・武田恭彰・時枝克安・伊藤晴明1988「上竹西の坊遺跡」岡山県古代吉備文化財センター編『山陽自動車道建設に伴う発掘調査3』岡山県教育委員会

大分市教育委員会2002『松岡古窯跡群』

大野城市教育委員会1997『牛頸石坂窯跡－E地点－』

岡戸哲紀編1996『陶邑・大庭寺遺跡V』大阪府教育委員会・（財）大阪府文化財調査研究センター

亀田修一2008「牛頸窯跡群と渡来人」『九州と東アジアの考古学』九州大学考古学研究室50周年記念論文集刊行会、379-406

亀田修一・白石純・徳澤啓一編2014『備前呂久窯跡群の研究』岡山理科大学考古学研究室

亀田修一・白石純・徳澤啓一編2016『佐山東山窯跡群第5次発掘調査概報』岡山理科大学考古学研究室

亀田修一・白石純・徳澤啓一編2017『佐山東山窯跡群第6次発掘調査概報』岡山理科大学考古学研究室

小林行雄1965「技術と技術者」有光教一・樋口隆康編『世界歴史第1巻 先史の世界』人文書院、344-365

崔秉鉉ほか2006『鎮川三龍里・山水里土器窯跡群』韓南大学校中央博物館

酒井清治2013『土器から見た古墳時代の日韓交流』同成社

佐原真1979「土器の用途と製作」大塚初重・戸沢充則・佐原真編『日本考古学を学ぶ2 原始・古代の生産と生活』有斐閣、40-60

柴田英樹1997「第5章 奥ヶ谷窯跡」江見正己編『藪田古墳群・金黒池東遺跡・奥ヶ谷窯跡・中山遺跡・中山古墳群・西山遺跡・西山古墳群・服部遺跡・北溝手遺跡・窪木遺跡・高松田中遺跡』岡山県教育委員会

武田恭彰1989「古代土器生産についての一予察（1）－鐘鑄場1号窯の遺物を中心に－」『古代吉備』11、古代吉備研究会、91-102

巽淳一郎1983「古代窯業生産の展開」奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会編『文化財論叢』同朋舎出版、659-685

田中琢1967a「Ⅲ 古代・中世における手工業の発達 1 窯業 Ⅱ 古代・中世窯業の地域的特質 （4）畿内」三上次男・檜崎彰一編『日本の考古学Ⅵ 歴史時代（上）』河出書房新社、191-212

田中琢1967b「畿内と東国－古代土器生産の観点から－」『日本史

研究』90、日本史研究会、76-87

田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店

玉田芳英1995「第V章 考察 3土器 B 長家王家の土器 ii 土師女の作った土器」奈良国立文化財研究所編『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告－長屋王邸・藤原麻呂邸の調査－』奈良県教育委員会、488-490

都出比呂志1982「原始土器と女性－弥生土器の性別分業と婚姻居住規定－」女性史総合研究会編『日本女性史1 原始・古代』東京大学出版会、1-42

都出比呂志1989『日本農耕社会の成立過程』岩波書店、265-297

中島恒次郎2017「日本古代・大宰府官制整備期の九州における食器様相」中村浩先生古稀記念論文集刊行会編『考古学・博物館学の風景』芙蓉書房出版、47-59

中村浩編1978『陶邑Ⅲ』大阪府教育委員会

中村浩1981『和泉陶邑窯の研究』柏書房

中村浩2001『和泉陶邑窯の歴史的研究』芙蓉書房出版

奈良国立文化財研究所編1969『平城京調査報告V』

奈良国立文化財研究所編1966・69『平城宮木簡』1、176

奈良国立文化財研究所編1995『平城京木簡1－長屋王家木簡1－解説』333・334

奈良国立文化財研究所編2001『平城京木簡2－長屋王家木簡2－解説』1975・1976

奈良国立文化財研究所編1995『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告－長屋王邸・藤原麻呂邸の調査－』奈良県教育委員会

橋口達也1989「似非土師須恵器」『横山浩一先生退官記念論文集Ⅰ 生産と流通の考古学』横山浩一先生退官記念事業会、251-272

藤田憲司・奥和之・岡戸哲紀編1995『陶邑・大庭寺遺跡Ⅳ』大阪府教育委員会・（財）大阪府埋蔵文化財協会

舟山良一・石川健編2008『牛頸窯跡群－総括報告書Ⅰ－』大野城市教育委員会

村上幸雄1985『法蓮古墳群』総社市教育委員会

望月精司1999「北陸型煮炊具の出現と成立過程－加賀地域及び小松市額見町遺跡の事例検討を中心として－」『北陸の考古学Ⅲ』石川考古学研究会、147-166

山本雅和・山田清朝1987「第7章 末東地域の調査 第2節 落合窯（AE-124）」兵庫県教育委員会編1987『青野ダム建設に伴う発掘調査報告書（1）』198-230

引用挿図（一部改変引用）

図1：亀田修一・白石純・徳澤啓一編2014・2016・2017

付記

佐山東山窯跡では、「葛原小玉女」へう書き須恵器壺が出土している。この人物も女性である。土師器作りの「女性？」とどのように関わるのかわからないが、この窯の周辺には女性が多そうである。今後、このような点を意識しつつ、さらに検討していきたい。